ゆうあい通信　第377号

2023年(R5) 8月10日

発行所　石 井 記 念 友 愛 園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025　E-mail yuuaisya@kijo.JP

あれから50年

園長　児嶋　草次郎

暑中お見舞い申し上げます。うだるような暑さが毎日続いていますが、お元気でおすごしのことと思います。８月２日の朝日新聞一面で、「今年の７月は日本の観測史上、最も平均気温が高かった」と報じていました。平均25.96度だそうです。地球温暖化の影響で、降る雨の量も、昔に比べると尋常ではなくなって来ており、各地で崖崩れや川の氾濫などが起きるようになってきています。50年後、100年後、この地球は大丈夫なのだろうかとさえ、感じ始めています。台風６号も沖縄周辺をウロウロし、反転して九州南部に向かい始めており、心配です（この通信は８月５日に書き始めています)。なんだかんだと言いながらも、人類は戦争を止めないし、都市はますます巨大化して厖大な電気を消費し、地球温暖化を促進しています。

ところで今回は、７月の「友愛通信」第376号の「福祉文化の再生の時」の内容についての、Ｂ氏との会話です。

Ｂ氏：非常に重要なことが書かれてあるような感じがして、何点か質問してみようと思いました。そもそも、児童養護施設で生活している子供たちって、「家庭に恵まれない子供たち」というイメージで、代りの「家庭」を与えてあげれば、スクスク育つ、つまり問題の解決と考えていましたが、どうもそんな単純な問題ではないのですね。ずっと昔は孤児院とか言われて、戦争や天災等で親を失くした子供たちが入って来ていましたよね。そういう子供たちであれば、今、国が進めているように、元の家庭に近い里親さんの所に行けば幸せになれそうな気がしていました。

私　：私は、中・高生の子供たちには、大まかに分けて三つの理由で入って来ていると説明しています。今Ｂさんが言われたようなケースは、「純養護」と言うのですが、お父さんお母さんが亡くなったり、病気等で養育が困難になった場合に入所するケースです。二つ目は、虐待が理由で入所するケースです。とは言っても、私は親を責める気持にはあまりなれません。子供が発達障がい等を背負わされていて、多動であったり、感情のコントロールができなかったりで、しつけがうまくいかなくなり、親御さん自身が精神的に追い詰められていった結果としての虐待であったりするケースがけっこう多いのです。親御さんが親族や地域から孤立していて、誰にも相談できなかったり、親御さん自身も特性を抱えていたりする場合もあります。

三つ目が、子供自身の抱えている課題を修正する必要があっての入所です。不登校もそうでしょうし、社会のルールに反する行動を繰返し、親御さんがお手上げの状態になった時、児童相談所の判断で施設入所を決めます。ちなみに今、児童養護施設に入所する子供のうち、65%は、何らかの虐待を受けていたと言われますし、37%くらいは子供自身が何らかの障がいを背負っていると言われます。これらの三つの入所理由は、単純に分けられるわけではなく、複雑にからみ合っています。

Ｂ氏：ふーむ。世の中のほとんどの人たちは、児童養護施設と言えば、はっきり言ってあなたが分けた三つの入所理由のうち、一番しかイメージしないと思いますよ。

私　：そうだと思います。だから、児童養護施設の問題を語り合う時には、相手の人は、この三分類の

どこをイメージしてしゃべっているのかを考えながら話す必要があります。じゃないと、話がかみ合いません。あの「新しい社会的養育ビジョン」は、まさに、１番目の子供たちだけをイメージして作られたものだと思います。二番目、三番目の子供のことはほとんど深く考えてない。重要なのは、そして難しいのは、二番目、三番目の子供たちのニーズにどう応えていくかという問題です。

Ｂ氏：そうですね。「友愛通信」の「福祉文化の再生の時」は、それについて考えようとするものですね。マズローの本能、①食欲、②性欲、③群れる、④攻撃・征服、⑤逃走の５つをあげて、思春期の課題を示されたのも重要なことです。この本能は、人間が動物である限りにおいて平等にそれぞれ背負わされる。私も子供を三人育てて来たけど、取っ組み合いのケンカもして来たし、「もうダメか！」と思ったこともある。施設の場合、そういう子供の集団生活の場なのだから、その大変さは容易にイメージできる。それにプラスして、先ほどの発達障がいや虐待による人間不信などの課題に向き合わなければならないのだから大変だよね。今回初めて、その大変さがイメージできたような気がする。施設で働いている職員の方々の大変さも想像しています。負けずにがんばってほしい。

私　：ありがとうございます。今度石井十次セミナーに講師として来てくださる、児童精神科医の富田仁先生が指摘してくださっているのですが、「彼らの攻撃性に少なくとも一定の期間耐えることのできる体制がなければ、そもそも処遇が成り立ちません」という言葉は、現場の職員たちに、勇気を奮い起こさせるありがたい励ましです。

Ｂ氏：だよね。施設において、養育の過程において、様々なトラブルが起きているのだろうと思います。そのつど、児童相談所や県当局から、施設の責任を問われたら、職員も自信を失っていくよね。バーンアウトしてしまうかもしれない。おそらく欧米の施設が崩壊していく過程は、その悪循環の結果なのだろうね。富田先生は「集団が『犯罪の学校』となる危険性」も指摘されているんだね。

私　：「家庭」やマニュアルやカウンセリングだけでは、子供たちのニーズには答えられないのです。発達障がいや愛着障がいに対する対処法や指導法を身につけていかねばなりません。子供がパニックになって暴れ出した時の対処法をあやまると、職員自身の指導の行き過ぎとして責任を問われます。

Ｂ氏：私自身の子育て時代を思い出すけど、職員も聖人君子じゃないのだろうから、大変だよね。

私　：それにもう一つ、重要な子供たち自身の課題があります。自分がなぜ施設で生活しているのかを考え、もし、自分の弱さが理由で入所しているのであれば、その弱さを克服する力を施設生活を通して身につけなければなりません。ここらへんが今の児童養護施設では、曖昧になっていると思います。

Ｂ氏：そうだよね。子供を守ることしか考えないのじゃないかな。ただ守るだけでは子供は育たない。貧困の連鎖とか言われるけど、それを繰返していくことにつながりかねないね。

私　：この前、中・高生の子供たちには、マズローの欲求５段階説についてについて説明しました。高校生の中にはこの心理学者へマズローを知っている子もいて、説得力ある話ができたのではないかと思っています。一般的には三角形の図形で説明されますが、基盤の方から行くと、生理的欲求、安心・安全の欲求、所属と愛の欲求、自尊心と他者からの承認の欲求、そして最後が自己実現の欲求です。基盤の部分がしっかり保障されて、徐々に上位の欲求へと上昇していきます。

　子供たちに説明したのは、次のような話です。生理的欲求、安心・安全の欲求、所属と愛の欲求までは小学生時代までに保障されるべき欲求。マズローは石井や留岡の次の世代の人だけど、それら人間としての基盤とも言うべき欲求を保障するために石井十次が岡山孤児院で考えたのが「満腹主義」であり「家族主義」です。留岡幸助で言えば、「三能主義」であり、「夫婦小舎制」です。これらはどちらかと言うと、子供を「守る」という次元です。現実的にはそのレベルに止まっている子供も多いのだけど、これらがある程度満たされると、次の「自尊心と他者からの承認の欲求」、「自己実現の欲

求」へと発展するのですが、これらを満たすためには、本人自身の積極的な行動も求められます。じっと待つ他人依存では、他者から承認もされないし、自尊心も育ちません。

そこで出て来るのが、グループワーク的な指導であるスポーツであり、友愛園の「労作教育」、北海道家庭学校流に言えば「作業」です。石井十次の「密室教室」・「米洗教育」は、そこへんのことをしっかり自己認識させるものでしょうし、「実行主義」は職員自らの姿勢を問うものであるでしょうし「実業教育」は、自己実現に向けてより着実にその欲求を定着させていくものでしょう。「旅行教育」というのもありますが「自尊心」を育てるためには、他との比較、つまり広く世界を知ることも必要ですから、大事な指導になります。

石井十次自身も、今で言えば発達障がいでした。当時そのような診断名はありませんが、そういう猪突猛進的な特性を自覚し、克服するために日記をつけるようになり、自らの言動をコントロールする「自戒自規」を作り、それを守ろうと努力を重ねます。石井十次に限らず、先人たちは皆、様々な修行で乗り越え、運命を変えていきました。

Ｂ氏：そうだよね。発達障がい・愛着障がいなんて昔からあったのだろうし、皆、自分で克服するしかなかった。今は平和が長く続いて、あまりに他人依存すぎるのかもしれないね。

私　：友愛通信前号でも書かせていただきましたが、人がヒトである限りにおいて、このような青春の課題を乗り越え、大人に脱皮していかねばなりません。特に児童養護施設や児童自立支援施設では、その特性が色濃く出る集団生活の場であり、特別の指導・支援が必要だと考えています。その子供たちに対峙するためには、職員にもそれ相応の覚悟が必要で、住込み勤務、北海道家庭学校での夫婦小舎制は、職員側の取り組み姿勢の本気度を現わしているとも言えます。

Ｂ氏：個人主義の欧米では、生活現場ではとても対応はできないと思うよ。サラリーマン的な感覚でも対応は無理だね。私などとてもできない。それから「施設生活を通して人間不信を乗り越え自律力等をどう身につけていくかが最大の課題」と書いてあったけど、そこら辺についてもっと聞きたいんだけど。

私　：さっきのマズローで言えば、最高レベルの自己実現の欲求の段階に達した時が、人間不信を乗り越え自律力を身につけた状態と言えます。スポーツや労作等によって、自信をつけ、自己肯定感・自己有用感が高まり、それと同時にプライドや誇りも育ち、志を持つようになります。世のため人のために自分も働こうと考えるようになるのです。そこまで行けば、プラス思考や感謝の気持も身について来ます。大学や専門学校に進学しようという意欲も自然に湧いてくるのです。これら一連の指導を、これらからどうカリキュラム化していくのかが、今後の課題です。日記指導や石井十次の「密室教育」のような個別指導も重要です。職員とある程度の信頼関係が構築され、自分の家族についても、客観的にとらえられるようになることも必要です。

富田先生は、それを「生活療法」として表現されています。ペスタロッチの「生活が陶冶する」の世界だと思います。

Ｂ氏：そこで先人たちの築き上げて来た福祉文化をもう一度学び直しましょう。ということになるのだね。移民社会のアメリカの教育法を学ぶよりよっぽどそっちの方が大事だね。そういう話を聞いていると、単純に里親委託率を上げるだけで、社会的養護・養育の問題が解決していくとはとても思えないね。施設の教育力・養育力ももっと高めていかねばならないだろうし、職員ももっと増やす必要があるよね。24 時間、365 日、施設の子供たちは生活しているわけだから、リスクも他の職場の３倍以上。もっと国は支えるべきだ。

私　：ありがとうございます。グローバリゼーションの波に乗っかって世界標準にもっていこうとする

学者先生方の考え方は、子供の最善の利益という大義名分を掲げてはいますが非常に危険だと思います。

B氏：今までモヤモヤしていたものの中から、現場の姿が見えて来た気がします。それから、これは私の感想だけど、「友愛通信」で感動した部分が二か所あります。

「友愛社に帰って、せっせせっせと花や花木を増やすことに努力して来ました。あれから50年、友愛社は、1年中花の絶えない環境となりました。」

「私が50年前実習した頃の先生も子供たちも、もうだれ一人いない。それであるのに厳然と家庭学校は存在し、歴史を刻み、そして、その福祉文化は守られている。」

私は「北海道家庭学校」を知らないけど、友愛社も家庭学校も、この50年、地道に児童福祉の歴史と文化を築いて来た。その息吹と時間が感じられ、美しいと思いました。その姿こそが日本の福祉文化だと思いますし、これからも大事にしてほしいと思いました。ありがとうございました。8月27日の石井十次セミナーでお会いしましょう。